

《研究ノート》

北米大麻販売店訪問雑感

成城大学文芸学部教授・治療的司法研究センター研究員 南 保輔

1 はじめに

2025年4月から1年間の研修の機会をいただいた。最初はイギリスのヨーク大学に滞在した。6月下旬からの夏のあいだ、オーストラリアのブリスベンで学会に出席したあと、北米とヨーロッパを転々とするようになった。学会出席と薬物依存治療施設の訪問調査、自助グループの活動参観、そして大麻販売店訪問などをおこなった。

ここでは、大麻販売店を訪問した雑感をまとめる。わたしは、薬物依存回復支援施設であるダルク (DARC) の協力をえて薬物依存からの回復者の調査をおこなってきた (ダルク研究会 2013; 南・中村・相良編 2018)。社会学を専門としており、薬物や脳科学の知識は乏しい。大麻規制は法律にかかわるが、この分野の知識も持ち合わせない。そういった人間の「雑感」として受けとめていただきたい。

2 訪問した店舗

訪問したのはカナダ、アメリカ、そしてポルトガルのそれぞれ2店舗ずつである。店舗名と所在地を以下に一覧で示す。

訪問はいずれも短時間のものだった。ふらりと入って、店内を一通り見て、店員にすこし話を聞いた。アメリカの2店舗はIDの提示を求められたこともあり、すこしまとまって話を聞くことができた。この報告が中心となる。ポルトガルの店舗では、南がポルトガル語を話すことができないために「インタビュー」と言えるよ

うなものは成立しなかった。そのために入ってみた印象のみとなっている。

店の印象や会話は終了後すみやかに記録した。南が代表として活動しているダルク研究会のメンバーにメールで報告するというかたちで数日中にまとめた。本稿の3節と4節ではそのようなかたちでまとめたものをかなり活用している。エスノグラフィ (民族誌) という作品形態があるが、ここでは「フィールドノーツ」を資料として引用することがある。これに類するものと理解されたい。

3節の元となったメール文を指宿信センター長にお送りしたところ、投稿を誘われたしだいである。そのほかの部分は、10月になって加筆したものである。訪問後にインターネットのウェブサイトを開覧して情報などを補足した。掲載している写真はすべて南が撮影したものである。

3 カナダの2つの店舗とアメリカのボウルダーの店舗

本節は、以下ダルク研究会あての報告をほぼそのまま再録する。そのために文体は敬体となっている。

ダルク研究会のみなさま

わたしはいまコロラド州デンバーにいます。日曜日にボウルダーで大麻専門店を訪問してすこし話を聞きました。その報告をいたします。

The Dandelionというお店でした¹。ボウルダーのいちばん中心的なBroadwayという通りにありました。ですが、地下に店舗があり見つけるのに

表1 訪問した大麻販売店一覧

店名	所在地
Blooming World Cannabis	カナダ・ブリティッシュコロンビア州・ラディウムホットスプリングス
City Cannabis Co.	カナダ・ブリティッシュコロンビア州・バンクーバー
Native Roots Cannabis Co.	アメリカ・コロラド州・ボウルダー
Sunset Herbal	アメリカ・カリフォルニア州・ロスアンジェルス
店舗名不明	ポルトガル・マデイラ島
Green Culture CBD store	ポルトガル・カシュカイシュ

すこし手間取りました。外階段から降りてドアを入ると入店チェックするためのスペースがありました。銀行のカウンターのように防弾ガラスの向こうに店員がいます。身分証明の提示を求められパスポートをわたしました。なにかパソコンに入力しています。それがすむと奥の部屋にはいるドアが解錠されて入ることができました。

カウンターはガラス張りで商品が陳列されています。しかしそのほかの壁3方は掲示物があるぐらいでした。カナダのバンクーバーのお店とは大違いのシンプルさです²。入ってすぐ左側に銀行のATMが置いてあるのが印象的でした。店員は大柄の白人男性が2人とインド系と思われる若い女性が1人でした。こちらもバンクーバーやラディウムホットスプリングスの店員が若い女性ばかりだったのとは対照的でした。顧客ですが、わたしがいるあいだに中年白人男性が1人はいつてきたぐらいでした。日曜日午後の3時すぎあたりの時間帯でした。

入口で身分証明書を確認した男性が質問に応じてくれました。長髪でひげもじゃでした。この店はレクリエーション用だとか。医療用販売の店があったが、ボウルダー市の規制があり最近店を閉めたということです。大麻はコロラド州内で栽培されたものでないといけないようで、それが掲示物などに見られる「native」というセールス文句の意味のようです。大麻といっても、その系統 (lineage という言葉でした。Magnolias Road のウェブサイトでは strain と言われています) があるとのことでした。それが商品のブランドとなっているとのことでした。業者がほかの州に移動したらどうなるといったことも話してくれたようなのですが、うまく聞き取れませんでした。

壁の掲示物には「100% natural」とか、「100% 州内産」とか、「100% confidential」とか、「100%」を使った売り文句が5つほど並べてあるものがありました。「confidential」ということといえば、ATMが置いてあることから現金払いで記録が残らないようにしたいという顧客側の希望があるのでしょうか。

また医療用のみが合法だったときは規制がきびしかった。自分が大麻を使っていることを他人に言うてはいけないとか、他人に譲渡するのはもちろんだめとかいうことでした。レクリエーション用が合法化されてゆるくなったとのことでした。

顧客層についても聞いてみました。年齢層は全般

だそうです。21歳以上という年齢制限があるのはアルコールと同じです。University of Colorado, Boulderがある大学町ということで若者が多めとのことでした。性でいうと男性のほうが女性よりもすこし多いとのことでした。

カウンターのショーケース内をていねいに見ましたが、あまりよくわかりません。これについてはあとのところで、ウェブで調べたことをご報告します。いずれにしてもラディウムホットスプリングスの店舗ではほんとうにいろんな花や葉っぱ、種 (と思われるもの) が産地別というかブランド別に陳列されていたのとは対照的にたいへんシンプルな印象です。

ひととおり聞き取りが終わったあとと壁にはってある掲示を見ていると、この店がボウルダーでベストという地位を7年ぐらい獲得したという掲示がありました。これを見ているときにも、これらの掲示内容についての説明を、聞き取りに対応してくれたマネージャーらしき男性がしてくれました。

カナダで訪問したお店の印象、つまりおしゃれで店員は若い女性だったということを言うと、生き延びるための努力だろうといったことを言っていました。ひょっとして日本人が来たりしているのかと聞いてみるとそんなに多くない。おまえは日本人として数か月ぶりに来た人間だということでした。

20分ほどの滞在だったのでしょうか。たいへんに興味深い体験でした。とくにカナダでの印象が残っていたのでその対比がきわだちました。知人といっしょに行ったのですが、その夫人は臭いがいやだからと入店しませんでした。やはり特有の臭いがすこし店内に充満していたようです。わたしも、ちょっとかいてみると商品の一部をすすめられてかいてみました。セールスの一環としてそういうことをしているのでしょう。

以下では写真を掲示します。

まず、カナダブリティッシュコロンビア州のラディウムホットスプリングスの大麻販売店です。訪問したのは2025年7月下旬です。



写真1

写真2

写真1、写真2とも外観です。写真2に写っている看板には年齢制限が示されています。ここはアル

バータ州との州境にちかく、2つの州の年齢制限がそれぞれ明示されていました。Blooming World Cannabisという店名をウェブで検索したところ、おしゃれなサイトが見つかりました。

<https://bloomingworldcannabis.com>

アクセス可能なようでしたらぜひご覧ください。そのおしゃれさがわかります。おしゃれに着飾った女性店員の写真も掲載されています。ちなみにこの店の隣はリカーショップです。カナダではアルコール類は専門店ではしか販売できません。大麻販売店とリカーショップが隣同士で並んでいるというのはちょっと特徴的でした。外からの店構えはリゾート地らしくどちらもよく似た山小屋ふうでした。

つぎにバンクーバーのお店です。こちらも2025年7月下旬訪問です。



写真3

<https://citycannabis.co>

こちらを上記ウェブサイトで確認しましたがたいへんにおしゃれです。Robson通りというバンクーバーで一番にぎわいのある通りにあります。

最後にボウルダーの店舗の写真です。こちらも2025年7月下旬の訪問でした。



写真4



写真5



写真6

写真4は通りから階段を降りたところの写真です。店舗入口の様子です。写真5は階段の降り口です。どちらも「Native Roots」という宣伝文句が見られます。写真6は降り口の階段です。店舗はハーゲンダッツのアイスクリーム店の下に当たります。

ウェブサイトについて

大麻ショップで売られている商品についての知識が不足していると感じてウェブを見ました。訪問し

たDandelionはあまりサイトが充実していませんでした。サイトが充実しているMagnolia Road Cannabisというサイトを閲覧しました。このお店はmedicalとrecreationと2種類の店舗があるようです。あと興味深いのは「dispensary (調剤薬局)」という用語が使われていることです。薬用だった時代の名残でしょうか。

知人夫人の話

ボウルダー近郊に住んで20年以上となる知人夫妻に案内してもらいました。A夫妻とします。いずれも日本生まれの日本人です。すでに大学を卒業した2人の息子さんがいます。A夫人は15年以上プレスクールではたらいてきました。その経験からいくつか紹介します。

お子さんの高校時代は、高校生で大麻を摂取している生徒たちはいたということです。A夫妻の息子さんたちはそういうことはしなかったそうです。また、A夫人の知人の話ですが、そのひとが知り合いの家に遊びに行ったときに、室内で大麻を栽培しているのを見たそうです。つまりそれだけ、大麻使用がひとびとのあいだに広がっているということです。

(以上 引用終わり)

4 ロサンジェルス店舗

ロサンジェルスでは、ノースハリウッドにあるCRI-Helpという薬物依存治療施設を訪問した。この施設は1971年からこの地で活動している。施設代表が誇らしげに言うように、この施設は「コミュニティの中にある」。つまり、ノースハリウッドは薬物依存者が多い地域ということだ。

実は、この点についてはひとつのやりとりがあった。ロサンジェルスでの宿泊地をどこにするかをCRI-Help代表のB氏に相談してみた。CRI-Helpのそばの安いモーターを見つけてここにしようと思うがどうかと。そうすると、治安が良くないのであまり勧めないという返事があった。強盗に襲われるというわけではないが、路上にたむろしているひとがけっこういるということのようだった。

実際に来てみてまず目についたのは酒類販売店(リカーショップ)の多いことだった。そして路上生活者と思われるひと目についた。落書きも多く、視覚障害者用の点字ブロックにも落書きがされていた。インド料理店

のガラスが割られているのも目撃した。訪問した大麻販売店もそういった一画にあり、東西方向に伸びる大きな通りに面していた。



写真7

写真8

写真9

写真7が店の東側からの写真である。店の奥行きがかなりある。中に入って見た印象では、店舗部分は全体の4分の1ぐらいかと思われる。あとの部分は倉庫になっているのか。あるいはこの部分で栽培していることがあるのか。写真8は大通りに面した店の正面である。写真9は、訪問した大麻販売店 Sunset から宿泊しているモテルまでの途中で見かけた店舗である。入口脇にはガードマンのような男性がいて写真を撮るのを控えたが、大麻の図柄がはっきりと示されていた。写真のように薬局マークが掲示されているが壁面はかなり派手に塗られている。薬用大麻の販売店かと思われる。

5 ダルク研究会への報告メール

店内は1室でした。入ってすぐ右にいかつい男性がすわっていてIDを求められました。パスポートをわたしました。情報をパソコンに登録しているようでした。2分間待てと言われました。

そして店内を見ることが許されました。印象としては、ボウルダーのお店の無骨さよりはバンクーバーのお店のファッションブルさに近い感じです。ただし、ATMがあつてIDチェックをしているところはボウルダーと同じです。グミなどがふつうに手にとれる棚においてあるのはバンクーバーのお店に近いです。ただし、調べたりそれをわたしたりするカウンターはありました。これはどこも同じでしょうか。濃縮製品は鍵のかかるショウケースに入っていました。

店主らしい小柄なヒスパニックの男性がなんでも聞いてくれと案内してくれました。ほかには客はいませんでした。午後7時すぎです。日本から来てちかくの薬物依存症の治療センターに調査に来たと言いました。CRI-Helpの名前は知らなかったようです。日本に昨年10月に行つたと話してくれました。東京、京都、奈良、沖縄と。どこが好きかと聞くと、東京は大きすぎると。大阪はクレイジーだと言われました。わたしは大阪生まれだと返しました。沖縄

はハワイみたいでしょということ、そうだなというかんじでした。

営業して10年ということです。最初は医療用だったと。2018年に娯楽用がカリフォルニアで合法化されて、こういう店にしたということのようです。商売は最初は良かったが最近はそうでもないということでした。

濃縮のものは効果がいいのかと聞くとストロングだと言いました。その後遺症は誰も知らない。20年後どうなっているかはわからないという回答でした。従来の使い方である花を吸っている分には問題ないということでした。なんか無責任という気がしたのですが、商売人とはそういうものなのでしょうか。

フェンタニルが出回っているが影響はないかと聞くと、うちのは合法ドラッグだから関係ないという回答でした。アルコールが合法的なのと同じなのだ。そして、わたしが、花を吸うのはビールみたいなもので、濃縮はウイスキーかと聞くと、はっきりとした答えはなかったようです。笑っていたのでしょうか。

顧客に日本人が多いかとたずねると4,5人いると。この近くに住んでいるひとだとか。そして、そういった顧客の半分が日本人でのこり半分はいろんなところからということでした。ヒスパニック系以外あるいは黒人、白人も含めた顧客以外のひとのバックグラウンドということでしょうか。10分ほどいたでしょうか。大麻の強烈なおいしませんでした。

じつは、この日お昼用の食べ物を買ったコンビニショップの裏にスモークショップがありました。どうも無認可の大麻販売店のようです。ウェブで見つけたニューヨークの事情紹介のサイトにはそうありました。また、このあと泊まっていたモテルまで歩いて帰ったのですが、その途上にもお店がありました。このお店はもっとクローズドな感じです。緑の十字のサインがあり、薬用ということのようです。店の上にかかげられた看板の文字の中央に大麻のマークがあつたので、薬用大麻販売店のようです。入口にガードマンらしき男性が立っていました。

(以上 引用終わり)

6 ポルトガルの2店舗

マデイラ島のお店は商業施設が入っている3階建てのビルにあつた。となりは理髪店だった。店内はそれほど広くはない。中年女性の店員が応対してくれた。彼女

は英語を話さないで、知人がかたことスペイン語で話を聞いてくれた。警戒されたかんじもあり、ほとんどなにも聞くことはできなかった。ただ、うちは合法だからということも言っていた。

カシュカインのお店も同様に明るいかんじだった。鉄道駅前のロータリーからその看板が見えた。ちょうど2人の来客に男性店員が対応していた。顧客は白人の中年女性で英語を話していた。このあとスペインに行くが、大麻を持っていても問題ないかと聞いている。個人で消費する分なら問題ないといった回答をしている。店員は英語が上手だし、かなり愛想が良い。この2人組はけっこうな買い物をしたかのような様子である。店内の商品はそれほど多くない。小さな飲み物用の冷蔵庫があり、そこにはふつうの炭酸飲料も売られている。明るいかんじとふつうのスナックなども置かれている点でマデイラ島の店舗とかんじが似ていた。

7 出会ったひとと

大麻販売店訪問についての報告は以上とする。最後に、北米で出会ったほかのひとたちの話をすこし紹介しておきたい。今回の北米調査ではいろいろなひとに出会った。薬物依存治療施設のスタッフと薬物依存者の自助グループであるNA (Narcotics Anonymous) のひとたちである。向かい合って録音しながら話を聞かせてもらうことをしてきた。その結果をきちんとまとめて報告することは別の機会となるが、印象に残っていることを少しここに書いておきたい。

施設スタッフもNAメンバーもアメリカ人ばかりである。アメリカの状況を念頭において南の問いかけに答えてくれている。施設のスタッフとして、あるいは自助グループの「先行く仲間」である古参メンバーとして、かれらはいろいろな薬物依存者に出会ってきている。そんな彼らは、大麻販売を基本的に法律で決められているものとして受けとめているようだった。とくに治療する立場のひとたちは、薬物依存者には、大麻を必要とするひとやあるいはそういった時期があることを事実として受けとめているようだった。治療にあたる側に必要な論理だと思われる。

NAメンバーとしての経歴の長いひとたちは、NAの12の伝統を尊重していた。とくに伝統10は「ナルコティクスアノニマスは外部の問題には意見を持たない。したがって、NAの名は公の論争で引き合いに出されるべきではない。」というものである。大麻規制関連の政策はさまにそのような「外部の問題」である。この伝統10のおかげで意見表明することもない、態度を決めな

いといけないといったことはない。伝統10に助けられていると述べたメンバーもいた。

最後にある出会いを紹介したい。ノースハリウッドでの調査を終えて、つぎの調査地であるアナハイムに向かうためにAmtrakの駅のプラットフォームで列車を待っていた。南カリフォルニアのNAリージョナルコンヴェンションを参観するためである。中年と高齢の女性の2人連れに話しかけられた。母と娘のようである。この駅の近くに母親が住んでいて、遊びに来た娘が帰っていくのを見送りにきたように見受けられた。

なにをしているのかと聞かれたので、薬物依存の調査のためにやってきたと告げた。すると、おまえはまさにいいところにいるのだなというコメントがあった。そして続いて、中年女性の夫は、薬物依存者をサポートするボランティア活動をしていると言う。その理由は、夫婦の子どもが薬物のオーバードーズ（過剰摂取）で命を落としたからだとか。

フェンタニルという化学物質がカナダとアメリカで蔓延して、多くの人間がオーバードーズで亡くなっている。トランプ大統領は、その流通取り締まりを求めて中国などに高い関税を課した。フェンタニルを使用すると身体の動きがごちかなくなって、見てすぐにわかるという。カナダのバンクーバーで訪問した施設の周辺やノースハリウッドで南がそのような姿を目にすることはなかった。「大流行」をこの目で見るというのはむしろかしいのかなと感じていたところだった。だが、子どもをオーバードーズで亡くした家族に「たまたま」出会えるほどには「蔓延」しているのだと実感した。

これとの関連でもうひとつ。治療施設のスタッフのひとりに、薬物依存者へのスティグマが強くないのはなぜかとたずねた。その回答が、たいいていのひとが周囲に薬物を使っているひとがいるからだというものだった。言われてみれば道理であり、納得した。日本の「だめ、ゼツタイ」という薬物教育が、薬物依存者へのスティグマを涵養することになっていることは否めない。そのスティグマ解消の方途のひとつが、薬物使用のひろがりだというのは、納得できる一方でなにか複雑な感慨をいだかされた。

8 むすび

カナダとアメリカとポルトガル。物質依存との取り組みにおいてそれぞれ興味深い歴史を持つ3つの国で2つずつ大麻販売店を訪問した。身分証明書の提示を求められたということもあって、アメリカの2つの店舗でいちばんゆっくりと話を聞くことができた。

あまりていねいに観察できたわけではないが、カナダの2つの店舗は似ていた。同じブリティッシュコロンビア州にあるからかもしれない。アメリカの2つは、IDチェックがあったり、ATMが置かれていたり、いかつい男性店員がいたりというところは共通していた。カナダとアメリカの4つの店舗ともに、合法の商売としていかに売上をあげるかが最大関心であるようだった。

今回の北米滞在中に、シカゴで開催されたアメリカ社会学会において、トロントとシカゴの大麻販売店数の変遷と法規制との関係を経時的に調べた研究報告 (Chris M. Smith, 「Vice for Sale: Neighborhood Conditions and Illicit Markets」) を聞いた。Googleマップかなにかで営業している店舗の数を年ごとに調べている。シカゴの店舗数の増減は少なくその数は安定している一方、トロントでは増減が激しかった。カナダでは、トルドー氏が大麻使用の合法化を公約に掲げて2015年に総選挙で勝利したあと、実際に法律が整備されるまで時間があったりして、いわゆるグレイな期間があった。「無認可」営業があったということだ。政治経済学 (political economy) の研究であった。

このような体系的な研究がある一方、たまたま訪れた先でたまたま出会った大麻販売店を訪問した結果からなにが得られるのか。そこで生きるひとがなにをどう感じているかといった、南の主要関心については今後の報告を待たれたいとして締めくくりとしたい。

【参考文献】

ダルク研究会『ダルクの日々：薬物依存者たちの生活と人生』(知玄社、2013)

南 保輔・中村英代・相良 翔編『当事者が支援する：薬物依存からの回復 ダルクの日々パート2』(春風社、2018)

注釈

¹ 表1では、「Native Roots Cannabis Co.」としている。経営している企業名で、「Dandelion (たんぽぽ)」がこの店舗名と思われる。

² カナダの2店舗についての雑感もこのメールより先に、研究会メンバーに送ってあった。